

飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

第 215 回 「ホワイトライト／ブラックレイン」

2007.8.19

62 回目の暑い 8 月 15 日（終戦記念日）がやってきた。あの痛ましい戦争の残像は、我国では決して消え去ることはない。

広島・長崎への原爆投下と被爆者たちの人生を追ったドキュメンタリー映画『ホワイトライト／ブラックレイン』（邦題『ヒロシマナガサキ』）が、広島原爆忌の 8 月 6 日、全米ケーブルテレビ HBO で放映され、大きな話題となっているようである。

監督はアカデミー・ドキュメンタリー部門賞を受賞したスティーヴン・オカザキ氏（55）。日系 3 世のオカザキ監督は「アメリカで語られてきた原爆は、開発や投下などに対する議論であり、人の命はあまり語られてこなかった」と意義を強調する。映画は 14 人の被爆者と、原爆投下などに関与した 4 人のアメリカ人の証言に記録映像などを加え、原爆の悲劇を描く。

「（周囲は）黒こげの魚。言葉にするならそんな風にしか言えません...」「看護婦が病室にくると、大人も子供も『殺せ』と嘆願する。痛いから、治療が...」「患者があっちでもこっちでも死に始める。何の病気か分かんないんですよ...」政治的、学術的な解釈を排除し、被爆者らの証言や記録映像が淡々と続く。だが、訴えかけてくるものは力強い。「被爆者の話す言葉にこそ、真実がある」とオカザキ監督。日本でも今月下旬から全国で順次公開される予定である。

久間章生前防衛相の発言ではないが、アメリカでは原爆投下を正当化する傾向が強く、これまで、被爆者の実態を伝える映像作品は、ほとんど作られてこなかった。彼らは学校教育の場においても、原爆投下の正当性を子供たちに植え付けてきた。

「もし原爆を使わなければ、戦争は長引き、より多くのアメリカ人、日本人が犠牲になった。アメリカは、人類に対して正しい選択をしたのだ」と正論（？）を述べ、その実態は…「憎つき人種は、ジャブなのだ。全てはリメンバーパールハーバー」…と。

もし、どこかへ行くのなら、まず、広島・長崎へ行きなさい。日本人なら躊躇なく、私はそう、お勧めしたい。人類史上唯一の被爆国・日本、その痛みが、本当に分かるのは日本人しかいない。「まるで地獄絵、あの残虐たる悲劇は思い出したくない」…多くの日本人が衝撃的なトラウマになり、「もの言わぬ国民」になってしまった。唯一その精神的拠り所を、駐留軍が認めた憲法第 9 条とし、行動も主張もせず、戦後 62 年間も言葉遊びに終始してきた日本人。核兵器を終戦の言い訳にしてきた歪な屁理屈を、一体何時まで言わせておくつもりなのだろうか。忘れても、忘れさせてもいけない事実があった。

アメリカ人や日系人、益しては玉石混淆の国連なんぞに、任せておくわけにいかない。地球上からの核兵器の廃絶は理想、でもせめて、イランや北朝鮮のような新規核武装の根絶と核兵器使用の禁止を、全世界へ向け訴えるべきは、日本人しかいないのである。それこそ「平和の使徒」というべき日本人の、使命であり、人類に対する責任であろう。

まず、広島・長崎へ行くべし、「ホワイトライト／ブラックレイン」を見るべし！である。